

はじめに

いわゆるラテンアメリカでは、16世紀に中米のアステカ帝国と南米のインカ帝国が滅亡し、スペイン人による入植が始まった。それ以前には、ラテンアメリカ由来の中型動物であるリャマやアルパカが家畜として飼育されてきたが、リャマやアルパカなどのラクダ科動物は生乳分泌量が少ないことや、荷駄獣や毛の利用という別の用途目的があることなどから、乳利用の文化がなかったといわれている。対して、スペイン人がヨーロッパ大陸から持ち込んだウシやヤギなどは搾乳がおこなわれ、スペイン人を中心に乳利用や乳製品の飲食文化がみられた。その後、20世紀初め頃からグローバルな食品会社の生産に刺激されて、チーズやヨーグルトなどの乳製品がラテンアメリカの各地で広まるようになった。現代のラテンアメリカの生業という観点から見た場合、ウシ、ひいてはヒツジやヤギの乳利用は無視できず、酪農は同地域にすっかり根付いた生業といえる。

そして酪農業は農業よりも、よりコンスタントに市場経済とかかわりを持つ生業である。農業の場合、中南米で生産されるジャガイモやトウモロコシなどは、年に1、2回の収穫であり、世帯によっては余剰を販売する好機となる。対して、酪農業の場合、ほぼ1年中（正確には雌ウシ1頭当たり、1年のうち約300日間）搾乳することが可能であり、自家消費に用いられる量はわずかで大半の生乳はマーケットで販売される。そして、生乳を販売することで週に1回の割合で現金として収入を得る機会が得られる。こうした収入を得る頻度の違いや、その収入をもとにマーケットで買い物をする頻度を考えてみても、酪農業は農業よりもより日常的に市場経済とかかわることが理解できる。

本書の研究対象である南米ペルー共和国（以下、ペルー）北部山地のカハマルカ県は国内有数の酪農地帯であり、主要酪農山村では農民たちの多くが生乳や乳製品の販売を生活の基盤としている。彼らは、日常的にマーケットにかかわるため価格に敏感であり、貨幣経済を基盤とした何かしらの損得計算をおこ

なっている。例えば、彼らの間では遠く離れた都市のマーケットの出来事について話題が持ち上がることもある。「リマの市場（いちば）では、チーズの値段が下がった／上がった」等の会話は、日常茶飯事であり、さらに、「○○（仲買人の名前）のトラックが横転したらしい。チーズが飛び出して、商品にならないらしい」という全国ニュースにもならない交通事故についてまで噂されることがある。なぜ都市から何百kmと離れた遠い山村でそのようにチーズの流通に詳しいのか聞いてみると、「（自分の）家族や親族がリマに住んでおり、チーズを買い付ける仲買人をしているからだ」という。

また、山村でのチーズ売買の農村市場（いちば）に行ってみると、そこでも価格の変動についての会話がされている。「価格はどうか（¿Cómo es el precio?）」「下がっているよ（Baja el precio.）」「上がっているよ（Sube el precio.）」という会話が、挨拶のように交わされている。仲買人はもちろん、農民の関心事は、チーズの量や品質よりも、まずは価格にあるようにみえる。それ以外にも、「（あそこの仲買人は）買値が高い（Paga más.）」または「きちんと払ってくれる（Paga bien.）」のように、農民たちの仲買人選びに「価格」という要因がみられるのは確かである。

当該山村の農民たちの多くは都市の大消費地に向けたチーズを生産販売しているため、都市の消費動向によって（仲買人などの）買い取り価格が上下し、農民の手にする収入は頻繁に変化する。こうした背景があるため農民たちの関心の多くはチーズ価格の変動に払われる。言い換えると、彼らの生活は市場経済なしでは成り立たないくらい、密接なかかわりを持つものとなっている。

このような「価格を気にする」農民像は、筆者が調査前にイメージしていたものとは異なっていた。つまり、アンデス中央・南部高地に広くみられる閉鎖的で、商人を警戒する古典的な農民像では理解できないのである。そのことに気づくと、目の前のチーズに関する生産や売買が、今日的でわれわれと同時代を生きる農民の営為のように見えてくる。そのため、彼らの都市マーケットとつながりを持つ経済活動を民族誌的に分析することで、アンデス山村における「現代の」文脈に即した農民の姿を再考する必要があると強く思うようになった。

では、カハマルカ県山村の農民の経済的特徴をどのように描いていけばいいのか。彼らの生業を簡単に整理しながら本書の目的と狙いについて述べておこう。

当該山村のチーズを生産販売する人々は、自家消費のためにジャガイモやトウモロコシなどを耕作しながら、同時に乳牛を中心とする家畜飼育をおこなう「農民」であり、場合によっては、近隣農民から生乳を買取って自宅の製造所でチーズを生産する「チーズ生産者」でもある。こうした農民たちにとって、地域マーケットのような市場経済の領域は恒常的に参入し、生活のために多くの利益を得ようと計算して交渉する領域である。さらにチーズ生産者と彼に生乳を提供する農民との関係では、そうしたマーケットの領域でない村内において、生乳提供と代金支払いという貨幣を介した交換関係がみられる。そのような貨幣関係は、マーケットの領域同様に単純な収支計算を必要とする。対して両者は同じ山村に暮らすため、双方の間には損得計算を介さない社会的な振る舞いが重視される場合もある。つまり、彼らは村内や村外でのチーズ取引において損失を出さないように計算しながらも、村内での日常的な社会関係を維持しようとする、市場経済の利益追求と社会関係の維持との双方に対する「計算」や「配慮」が欠かせない。さらに近年では、農村開発による収入拡大目的の技術供与によって、より近代的な技術や知識を彼らは身に付けるようになるに従い、彼らの利益追求を目的とした経済活動にかかわる選択肢は多様化・複雑化してきている。

こうした簡単な描写からも、チーズを生産販売する農民の日常生活に、市場経済での利益追求を目指す領域と村の中での社会関係を重視する領域との双方が想定できる。それでは、彼らはいかに双方の間を定期的に行き来し、さらに一見相反するかのようにみえる双方の領域が重なる状況に、いかに対応しているのだろうか。本書の目的は、彼らがどのように市場経済と山村の社会関係との双方に結びついているのか、その活動を経済人類学的視点から民族誌的に描くことである。彼らの経済活動は、グローバル市場の不可逆的な影響の中で抵抗や逃散という結果を導くわけではなく、日常的な選択の積み重ねによって自らの居場所を確保・編成していくものであることがわかるだろう。

世界中で市場経済の影響が顕著になるにつれ、市場経済の農村社会への影響が経済人類学の中で議論されるようになった¹⁾。その議論の中で、多くの研究者によって実体主義・形式主義の論争や、モラルエコノミー・ポリティカルエコノミーの論争のような二分法的議論が展開されてきた。実体主義やモラルエコノミーは、農村全体あるいは民族集団に固有の経営方法に主眼を置き、その経営にかかわる文化的要因や社会システムを明らかにしてきた。一方、形式主義やポリティカルエコノミーは、農民個人の利益追求に主眼を置き、彼らの合理的選択を指摘してきた。しかし、本書を通して論じていくように、文化的要因や社会関係に基づく利益か、個人の利益追求かという議論の枠組は、農民たちが常に一つの枠組に従い、一つの目的のために行為するという、それ自体疑わしい前提に基づいているように思われる。実際、本書に登場する農民の大半は、村内や世帯内で必要とされる諸価値を維持しながらも、市場経済の原理を理解し利益追求をおこなっており、この点で経済人類学の2つの潮流の双方によって、少なくとも部分的には議論することが可能である。そこで経済人類学の蓄積を踏まえて、今一度、盛んに議論された二項対立の論争を再考し、市場経済の中での農民の営為を捉え直す必要がある。

上記のような農村社会内の価値と市場経済の原理の双方を考慮する農民の登場は、村内において市場経済なしでは生活が成り立たなくなりつつある現状を反映している。こうした山村の変化に対応し、また従来の二項対立の議論を超えるために、近年のラテンアメリカ農民研究では農民の「世帯(家)モデル」が提起され議論されている。だが、このモデルでは、あくまでも農民の世帯経済の外側に市場経済を置く図式をとっている。つまり、こうしたアンデス農民研究の多くでは農民はマーケットの周辺に位置し、市場経済とは異なる価値を重視するため市場経済に消極的にしかかかわらないと論じられてきた。対して本書では、今日的な農村の状況を扱っている。そこでは、農民にとって地域マーケットや商品流通は所与のものであり、生活に必要なマーケットに対して彼らはさまざまな選択や戦略をおこなっている。特に、本書で扱うチーズを生産販売する農民は、市場経済の原理を理解し、基本的な計算能力や専門的な技術を持ったうえで、積極的に市場経済に参入して利益追求を試みている。この

ような農民たちが彼らなりに市場経済に順応している実態を解明するためには、彼らの生業のみならず、村内での市場経済に向けた生産や村外での仲買人との交渉、さらに農村開発の影響まで含めた広いを持って村内と村外での活動を連続するものとして捉えることが必要である。

こうした広い視点から当該山村の農民の経済活動を考えると、従来の経済人類学やラテンアメリカ農民研究が関心を持ってきた、農村コミュニティ内での社会性と個人の市場的利益追求との結びつきについて、バリエーション豊かな実践形態を見いだすことができる。まさに彼らは、さまざまな意味で社会／市場の結びつきを体現するものであり、関係や状況に応じてさまざまな姿をみせてくれる。村内における彼らの社会性と利益追求とが重なる状況では、彼らは、日常生活に着実に浸透するグローバル経済・市場経済の影響に対してたくみに順応する実践者である。農村マーケットでの彼らと仲買人との取引では、マーケットと農村社会が接近する境界における交渉術から商人相手に渡り歩くことができる戦略家の一面が垣間見られる。彼らと農村開発とのかかわりでは、都市のマーケット理論を持ち込む支援者と自らの居場所を探ろうとする参加者（農民）との軋轢において、経済原理の曖昧さや多様さに付け込む編成者としての姿が窺える。彼らの経済活動から社会／市場とのさまざまな現れ方を考察することで、従来の経済人類学的研究にみられた二分法的な議論を乗り越え、より実践的なレベルで双方に順応する、農民の戦略と選択を描き出すことが可能である。

このような活動を民族誌的に描写することで、本書は広く、従来の社会／市場の二分法に収斂されない、現地の「よりよく生きるため」の知恵と苦勞を提示したい。現地でおこなわれている経済活動は、われわれとは異なる、遠い国の出来事ではなく、われわれと同じような「現代的な」感覚を持つ人々によって日常的に繰り返される活動である。われわれの場合を考えてみても、親しい間でプレゼントを交換することがある一方で、そのプレゼントを買うために値段や品質を吟味することはあるだろう。また、近所付き合いや会社などで期待される振る舞いと、こうしたいという自分のわがままな思いとの折り合いに苦勞することがあるかもしれない。こうした日常の一場面をとってみても、社

会／市場は実感を伴わず、われわれの生活の一部となっており、そして、そこでの知恵と苦勞しだいでは、人生をより輝かしく生きていくことは可能であると信じている。そのためには、社会的に振る舞う領域と市場経済との領域を整理する必要がある。そこで、遠く離れたペルー山村の暮らしの中での経済活動とそれに伴う計算と配慮を紹介することで、今一度、実態のつかめない日常の社会と市場のあり方について考えるきっかけとなれば幸いである。

2020年7月

古川 勇気

- 1) 近年の経済人類学についてまとめた研究 [ハン、ハート 2017] を参照。

チーズづくりの民族誌

ペルー山村の暮らしと市場をつなぐ「計算」と「配慮」

目 次

はじめに	i
第1章 経済人類学の農民研究と本書の目的	2
1 ラテンアメリカ農民研究	3
2 農民研究における二分法的論争	7
3 アンデスの「世帯(家)モデル」と市場/社会の重なり	14
4 アンデス北部山村の今日的な状況	19
5 本書の構成	29
[第1部 カハマルカ県酪農業の概要と乳製品を販売する農民の生活]	
第2章 カハマルカ県酪農業とチーズ流通網	36
1 はじめに	36
2 ベルー農業の中での酪農業	36
3 カハマルカ県の概要と酪農業の位置づけ	38
4 カハマルカ県酪農業の歴史と現在	42
5 さまざまなカハマルカチーズと流通網	45
5-1 さまざまなカハマルカチーズ	45
5-2 カハマルカチーズのさまざまな流通	47
5-3 フレッシュチーズ流通網	51
5-4 マンテコッソチーズ流通網	56
6 カハマルカ県酪農業の多様な市場	61
第3章 チーズ生産者の消費と社会関係づくり	64
1 はじめに	64
2 農民の交換活動	65
3 チーズ生産者の食生活と関係維持の様子	68
3-1 チーズ生産者の食生活と消費	69
3-2 チーズ生産者による関係の維持・強化	74
4 チーズ生産者の社会関係づくり	75
4-1 農業での労働交換	76
4-2 チーズ生産ならではの互酬性	79
4-3 チーズ生産者がおこなう金銭的やり取り	82
5 チーズ生産者の消費と社会関係づくり	84
第I部の小括	89

〔第Ⅱ部 村内における市場経済の影響と農民の振る舞い〕

第4章 農村における市場経済の影響と農民の特異な経験	92
1 はじめに	92
2 農民の流動的営為を捉える視点	93
2-1 アンデス農民研究	93
2-2 農民の人生経験からの計算	96
3 チャンタ・アルタ村での主な生業	99
3-1 チャンタ・アルタ村と村人の生業の概観	99
3-2 生乳および乳製品の生産	100
4 ケシーリヨを作る農民、生乳を売る農民、チーズを生産する農民	102
5 人生経験に基づく選択	114
6 市場経済に積極的に参入する農民	122
第5章 村内での利益追求と協調意識—社会／市場の重なり	127
1 はじめに	127
2 農村の協調意識と市場での利益追求	128
3 ワルガヨック山村での農村開発	132
4 チーズ生産者の贈与と農民の要求	134
4-1 チーズ生産者と近隣農民の収入の違い	134
4-2 チーズ生産者ならではの贈与とそれ以上の要求	137
4 カルナバルの祭り	144
5 利益追求と村での協調意識	146
第Ⅱ部の小括	151

〔第Ⅲ部 都市の動向と村外に向けた選択〕

第6章 ケシーリヨ市場の取引関係—農民と仲買人	154
1 はじめに	154
2 取引関係に関する先行研究	154
3 ケシーリヨ市場の概要	160
4 ケシーリヨの売買取引	162
4-1 ケシーリヨ取引に関する諸要因	163
4-2 仲買人の買い方：価格の釣り上げから品質重視の信頼関係まで	164
4-3 農民の売り方：信頼関係と利益追求、さらに取引相手の変更	167

5	取引変更の背景	172
5-1	農民の思惑	173
5-2	仲買人の事情	174
5-3	破たんしない信頼関係	177
6	主体的に取引を選ぶ農民	178
第7章	農村開発とチーズ生産者の選択－農民と開発支援者	184
1	はじめに	184
2	開発支援と農民の選択	185
2-1	開発の「余白」	185
2-2	ラテンアメリカの農民像	187
3	カハマルカチーズ品質向上のための農村開発	191
4	開発支援者と参加者の状況認識の違い	193
4-1	外部市場でのチーズ価格決定要因	193
4-2	参加者の家計状況の変化	196
4-3	スーパーマーケットとカハマルカチーズ市場	198
5	農民の選択と計算	201
5-1	フェリシダ－の途中離脱	201
5-2	マイコルたちの選択プロセス	203
5-3	マイコルたちの計算方法	206
6	農民の計算と開発の「余白」	208
第Ⅲ部	の小括	214
第8章	農民の計算と配慮の実践	216
1	農民のさまざまな計算と配慮	217
2	カハマルカ県山村のチーズを生産販売する農民の計算行動	224
あとがき		230
参考文献		235

 図一覧

●図

図1	マイヤーやグードマンらの調査した時代の農民と取り巻く状況	24
図2	本書で扱うチーズ生産者でもある農民とそれを取り巻く状況	24
図3	リマ県、アレキパ県、カハマルカ県の牛乳出荷量の推移	38
図4	カハマルカ県の位置	39
図5	カハマルカ県における金産出の推移	39
図6	カハマルカ県における銀産出の推移	40
図7	カハマルカチーズのタイポロジー	46
図8	チーズ流通網のタイポロジー	49
図9	ワルガヨックの位置	52
図10	フレッシュチーズ流通網の略図	55
図11	チャンタ・アルタ中心村の位置	57
図12	マンテコッソチーズ流通網の略図	60
図13	チャンタ・アルタ中心村の雌ウシ頭数別の世帯の割合 (n=65)	101
図14	ヌエバ・ユニオンの雌ウシ頭数別の世帯の割合 (n=17)	101
図15	チャンタ・アルタ中心村の収入手段別の世帯の割合 (n=65)	101
図16	ヌエバ・ユニオンの収入手段別の世帯の割合 (n=17)	101
図17	チャンタ・アルタ中心村の家族の人数別の世帯の割合 (n=49)	101
図18	ヌエバ・ユニオンの家族の人数別の世帯の割合 (n=17)	101
図19	各分析視点の配置	158
図20	売買取引パターン	178
図21	農民の計算行動の範囲	225

●表

表1	1952~1981年のカハマルカ県からの主要5地域への移民人口	43
表2	朝食食材の購入か/そうでないかの違い	70
表3	昼食食材の購入か/そうでないかの違い	71
表4	夕食食材の購入か/そうでないかの違い	72
表5	1年間のマイコル家族の消費状況	73
表6	クリスティーナのケシーリヨ生産販売による家計の状況	104
表7	カルメーラのケシーリヨ生産販売による家計の状況	106
表8	ローサのケシーリヨ生産販売による家計の状況	107
表9	サウールの生乳の販売による家計の状況	109

表10	フアナの生乳販売による家計の状況	111
表11	ジョイのチーズ生産による家計の状況	113
表12	「生産形態」「都市に対する価値判断」「子供の将来」に関する 農民の選択の整理	115
表13	チーズ生産者の1週間の家計状況 (二重底鍋導入後の2015年2～3月のある1週間：雨季の終わり)	135
表14	近隣農民の収入状況	136
表15	カルメーラの市場での買い物リスト	174
表16	殺菌チーズと非殺菌のチーズの購入理由 (n=25)	176
表17	1年間の農業における「作付け」「収穫」のスケジュール	195
表18	農繁期の作業スケジュール (マイコル世帯の場合)	195
表19	農民の1週間の家計状況 (二重底鍋導入以前の2013年3～4月のある1週間：乾季のはじめ)	197
表20	農民の1週間の家計状況 (二重底鍋導入後の2015年2～3月のある1週間：雨季の終わり)	198
表21	スーパーマーケットでの価格と チーズ市場における仲買人のチーズの売値	200
表22	第3～7章における農民の計算と配慮の整理	222

●写真

写真1	殺菌チーズ	48
写真2	アレンジチーズ	48
写真3	フレッシュチーズ	48
写真4	ティボ・スイソ	48
写真5	マンテコッソチーズ	48
写真6	売買されるケシーリョ	48
写真7	仲買人のチーズ詰めの様子	56
写真8	トラックのチーズを詰める様子	56
写真9	カルド・デ・ベルデとパンの朝食	69
写真10	ある日の昼食	71
写真11	山村の風景	74
写真12	ジャガイモの収穫の様子	77
写真13	ユンタを使って畝起こしをする様子	77
写真14	昼食の様子	77
写真15	ホエーを取り除く様子	80

写真16	コンクールでの搾乳の様子	99
写真17	教育プログラムの様子	133
写真18	製造所の様子	133
写真19	祭りでのチーズ品評会の様子	145
写真20	定期市の様子（手前がケシーリヨ市場）	160
写真21	ケシーリヨをはかる様子	161
写真22	マンテコッソチーズ作りの様子	175
写真23	二重底鍋を使用する様子	192

凡 例

1. 本書では、実在する山村を取り上げるため、その一部は仮名で示している。先行研究において実名で紹介されている山村に関しては、相互参照のために実名を用いる。
2. 同様に調査地の人名には、既存の文献にも登場する大統領・聖職者などを除き、一貫して仮名を用いる。また人物の年齢は、2012～14年の本調査の時点で確認あるいは推定されたものを示す。
3. 本書中では原則として、聞き取りの時点と、当該の内容の後ろに「(〇年〇月の調査記録より)」と付記する。
4. 現地通貨の単位はヌエボ・ソル (nuevo sol) であるが、本書では、単数形の「ソル」という呼び方に統一する。なお、2013年3月当時では1 \$ \approx 2.55～2.58ソルであり、1ソル \approx 36円であった。山村での物価と日本の物価を比較すると、約5分の1から3分の1である。
5. 本書の対象地域は基本的に、ペルー、カハマルカ県のワルガヨック郡山村とチャンタ・アルタ村の2つの地域である。本書を通じて議論することだが、ワルガヨック郡山村のチーズを生産販売する農民は、自宅の一部を製造所として改装し、ガスコンロや大鍋などの十分な設備投資をおこなっているため、本書では、文脈に応じて「農民」ないし「チーズ生産者」と呼ぶ。一方、チャンタ・アルタ村の農民は、そのような設備投資をおこなっていないものが大半で、そのような農民は簡易な鍋を火にかけてチーズを作るため、チーズ生産者とは呼ばず、「チーズを生産販売する農民」と明記する場合も含め、あくまでも彼らを「農民」と呼ぶように統一する。

チーズづくりの民族誌

ペルー山村の暮らしと市場をつなぐ「計算」と「配慮」

第1章

経済人類学の農民研究と本書の目的

本書で取り上げるのは、ラテンアメリカではごくごく当たり前の農民の日常的な経済活動である。現地の生活では、村というコミュニティの中での「社会性」と、家族を養うために「稼ぐこと」とが求められ、両者は対立・並存・重なりなどの形で立ち現れる。本書の目的は、当該山村の農民がこの双方にいかに向き合い、対応しているのかを、暮らしの中にみられる彼らの計算と配慮に着目して、民族誌的に分析することである。彼らの経済活動は、貨幣経済が所与のもととして存在する現代農村において、グローバル経済に抗うのではなく、順応することで、自らの居場所を編成しようとする日々の選択によって成り立っている。

ペルーといえば、日本から見て地球のほぼ真裏（反対側）に位置して、そこでの農民の営為は遠い異国の出来事のように思われるかもしれない。だが、会社組織や地域コミュニティなどの中で生活するわれわれにとって、彼らの生活の知恵や苦勞はさまざまな意味で参考になるに違いない。生活の中で、周囲の人たちとの付き合いを大切にしながらも、一方で、手元にはきちんとお金を残しておきたいという経験は、多くの人がしてきただろう。グローバル市場の波がおし寄せているペルー山村において、自らの居場所を作り出そうとする農民の経済活動を描き出すことにより、われわれの社会において「よりよく生きるため」のヒントを導き出せればと考えている。

1 ラテンアメリカ農民研究

本節では、本書の研究対象地と文化的歴史的な共通性の高いラテンアメリカについて、人類学者がいかに、都市に代表される村外の領域とのかかわりで農村社会や農民の営為を論じてきたかを概観する。まずラテンアメリカ人類学における古典的研究を取り上げて、農村と都市のような村外領域との関係がどのように論じられてきたかを確認する。次いで1980年代までには、アンデス人類学では農村共同体内部の文化的要因などが注視されるようになる一方、大半の研究では農民の経済実践や流動的な営為が主題化されてこなかったことを示す。最後に、1980年までのアンデス人類学が近年ではどのように評価されているのかを確認したうえで、古典的研究にみられた、農村を村外の領域とのかかわりから議論する広域的な研究視点が、再び必要になってきていることを指摘する。

文化人類学において農民研究自体を学術的な研究分野として確立したのが、ラテンアメリカの農民研究者であるロバート・レッドフィールドである。彼の研究以前は、多くの人類学者はいわゆる「未開」社会の研究に熱心であった。他方彼は、都市と関係を持ちつつ都市の生活とは異なる文化を持っている農村社会に注目するようになり、メキシコの民族集団や農村においてフィールド調査をおこなった²⁾。彼は、ユカタン半島のインディオの村とヌアの部族集団などを多角的に比較し、各コミュニティの人間性 (humanity) について「全体」と「部分」という概念を用いて議論している [Redfield 1955: 149-168]。その中で彼は、人間性はコミュニティの影響を受けるが、コミュニティもまた個人の人格の影響を受けるほど小さいため、(研究者は) コミュニティ全体を理解でき、どちらか一方だけの見方は成り立たないと指摘する [Redfield 1955: 157]。さらに彼は、農民は都市の紳士階級 (ジェントリー) の影響を受けるため、農村の「部分的な」文化と都市などのより文明化した外部の「全体的な」文化を関連付けて議論可能であると述べる [Redfield 1956: 31-34]。そして彼は、都市では学校ないしは寺院で培われてきた「大きな伝統」がみられるが、村落社会の無学な人々の生活の中では「小さな伝統」が維持されてお